

## 手島さんのレインコート



東京府中RC

栗山三郎

手島知健さんは昭和30年6月3日、小田原RCのチャーターナイトが箱根塔の沢観光会館で行われた際、前RI理事(昭和27~29年)として挨拶されている時に脳血栓で倒れ、それ以来、今日に至るまで床につかれ療養をなさっている。この長い10年の間、東京RCの皆さんを始め全国のロータリアンの方々から温かいお見舞が続けられていることはほんとうに美しいものと思う。

手島さんは戦後のクラブ拡大に尽力され、特にご病気になる前の1年間はロータリー文献の翻訳や整理を深更に至るまで続けられ、相当の無理をなさっておられた。小林さん、柳瀬さん、東ヶ崎さんはじめ皆さんのご心配を受けながら、また私は主治医として時々ご注意申し上げたのであるが何かご自分の運命を予感して行動しておられたような気がする。ご病気になられた後は宮脇さんがお引受になり、小林さん外皆さんのご尽力により、立派な文献ができ上がった時は、病床でほんとうに嬉しそうにしておられた。

私は学生時代から手島さんには一方ならぬお世話になっており、その後主治医として治療したり、健康についてのアドバイスをしたりしている間に知らず知らずにロータリー精

神を吹き込まれていることに気付いた。

東京府中RCに入会できた時、手島さんは“君もやっと一人前になったね。その記念として、また僕の形見としてレインコートをあげよう”とそのレインコートにまつわる次の思い出話をされた。

「1953年RI理事としてパリの国際大会に出席した折、ロンドンに立寄り、バーバリー本店で求めた。これを着てロンドンの空港で、手紙や絵はがきを出そうとした所、切手は自動販売機で小銭の硬貨がなければ買えない。その際そばを通りかかった英国人が“貴方は切手を買えないで困っているのか”と聞き、小銭を必要なだけ出してくれた。大変ありがとうございます、その分をこれからとっていただきたいと1シリングを差出すと“これは貴方に差上げます。また誰か困っている時、その人に返してあげてください”と行ってしまった。その人はロータリアンではなかったが心からロータリー精神を生かしている人である。このレインコートはそんな思い出があって僕には貴重な品の一つなのだが、君がロータリアンになったのを記念してこれをあげよう。どうかこの精神を生かしてほしい」

私はこのレインコートを今大切に着ている“ロータリーに生きよう”というペッテンギル会長の目標と同様のことを私は25年前から今日に至るまで手島さんから聞かされている幸福な者の一人である。

(小児科医)